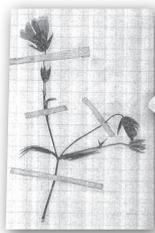


庭の荷風の庭



したたかな“理系感覚”を持つ作家・荷風の
文芸世界を訪ねる

訪問者 坂崎 重盛

短夜や問はずかたりの杯二つ ㊦

昭和十三年刊、岩波書店版・永井荷風『おもかげ』を手にする。函にも扉にも蓮の葉が描かれている著者自装のこの書には、巻頭から吉原に近い地方橋の電柱に「地方橋診療所」の文字が見える夜の街の写真が掲げられ、「よし原は人まだ寝ぬに けさの秋」とある。また、これは浅草のレビューだろう、太ももをあらわにしたラインダンスをする舞台の写真の下に「す、り泣くキオロンの音の夜長哉」「世の中や踊るはだかも年のくれ」「書割の裏や夜寒のちりほこり」など、他にも随所に（荷風本人による？）写真と句や漢詩が挿入されている。そして巻末に、

わが發句の口吟もとより集にあむべき心でもなかりしかば、書きもとゞめず、年とともに大方は忘れはてしに、をりくく人の訪来りし、わがいなむをも聴かず、短冊色昏なんと請うはる、ものから、是非もなく舊句をおもひ出して――

と「序」にのべられる「荷風百句」が披露される。

ゆきたい。

と、その前に、荷風の草木癖に言及した一文と、荷風自身や関連書の中の庭の描かれかたに少しふれてみよう。一つは昭和三十（一九五五）年、毎日新聞社刊『荷風思出草』。新書判、函人一六〇頁のこの小著、著者は永井荷風となっているが、荷風と相磯凌霜との対談を版元・毎日新聞の記者・小山勝二がまとめたもの。ここに登場の相磯と小山（筆名・小門）のことは、荷風ファンの読者にとってはなじみ深い名かもしれないが、くわしくはのちにふれることとする。さて、この『荷風思出草』の一条、

日ごろ館柳湾先生の「林園月令」を座右はなさず、愛読されているほど、花卉好みの先生は、偏奇館の昔から庭の一木一草の末にまで寄せられる深い関心と、暖かい心づかいは門の前から玄関先、庭のすみずみにまで行き渡り、「日々掃へども掃いつくせぬ落葉を掃ふ中いつしかは過ぎて秋は行き冬は来る、われは掃葉の情味を愛して止まず」



『おもかげ』所収のラインダンスの写真。もちろん浅草

この百句の中に「羽子板や裏絵さびしき夜の梅」「しのび音も泥の中なる田螺哉」「行春やゆるむ鼻緒の日和下駄」といった、いかにも荷風ならではの印象的な句が並び、前回の「永き日や――」や「青竹の――」の句も収められている。

そんな余技に、荷風さん本人はまるで拘泥や執着などとは無縁のポーズをとる、この、したたかなスタイルリスト荷風一流の俳句へのこだわりを見抜けなかつたか、見て見ぬふりをしたかの世人、俳句界の人々に差し出し、突きつけたのが加藤郁乎の『俳人荷風』

であり『荷風俳句集』だったのだ。

そして遺された吐吟、八百句といわれる荷風俳句空間に、どれほど多くの四季折々の植物あるいは庭の情景が詠われているか、まさに得がたきイクヤ先達の手引きを頼りに訪ねて